毎日新聞 二〇一八年十一月十五日(月)夕刊

「日韓外交の怪物」 崔書勉さん

憂いが深い。韓国最高裁が戦時中の徴用工問題で日本企業に賠償を命じたからだ。難交渉の末、日韓両政府が合意した国交正常化は何だったのか？　「未来志向」はスローガンだけだったのか？　知られざる日韓外交の光と影を追った。【鈴木琢磨】

1枚の写真がある。1969年2月の某夜、東京は赤坂の料亭「中川」で和服ならぬチマ・チョゴリ姿の女性とくつろぐのは安倍晋三首相の祖父、岸信介元首相、当時蔵相の福田赳夫元首相や衆院議長の石井光次郎氏らの顔もある。65年の日韓国交正常化後も懸案は多かった。そこで政治、経済、文化の相互協力を進める「日韓協力委員会」が発足する。会長は岸氏、その創立総会が2月12日から4日間、大手町の経団連会館であり、佐藤栄作首相と朴正熙（パクチョンヒ）大統領からの祝辞も披露された。関係者が秘蔵していたこの写真は日韓参加者の懇親のうたげのひとコマだ。

韓国からは80人を超える各界の重鎮が来日した。団長は白斗鎮（パクトジン）元首相、赤坂のうたげにもいる。総会で白氏はあいさつする。「私は1950年ごろ政府在任中、韓日国交正常化は歴史的必然と思い、多くの条件をつけることは必要ないと思いました。ただ、過去の両国歴史が貴国による一方的作為によったという事実は実にすまないことであったと、一言おっしゃって下さったら、すべての問題は解け得るものと、私個人は思っておりました。当時、米国の政策立案者は私に、貴国の首相吉田茂氏と韓日中間地点で会談するよう勧めたこともありました」（公益財団法人「国策研究会」＜吉田弘事務局長＞の会報「新国策」69年2月25日号）。対馬あたりで当時の李承晩（イスンマン）大統領と日韓首脳会談があったかもしれないが、そうすんなり進まなかった。

古いモノクロ写真を手に私はため息が出た。日韓関係の闇をのぞいたような気がしたからだ。あのころ、日韓の結びつきは「日韓癒着」と批判を浴びた。70年安保の時代でもある。昔を知る政治記者を訪ね歩いたが、この写真は知らなかった。ある記者は言った。「料亭政治の全盛時代だからね。中川は赤坂きっての格式ある料亭で、吉田茂さんもよく通っていた。でも、なぜ韓国の女性がいるんだろうね」。別の事情通はこう声をひそめた。「銀座と湯島に高級韓国料亭があった。日韓の応接室と呼ばれていた。そうした料亭から招いたんじゃないか」。一筋縄ではいかない両国関係の裏面史である。

ソウルの竜山駅前に設置された徴用工の像＝2017年8月、鈴木琢磨撮影

元徴用工賠償判決でまたもギクシャク

国交正常化の光と影

「日韓外交の怪物」と呼ばれる崔書勉さん＝東京都港区で10月17日、鈴木琢磨撮影

10月17日夜、「日韓外交の怪物」を囲む会が東京であった。国際韓国研究院院長の崔書勉（チェソミョン）さん。朴氏や岸氏らと親しく交わり、90歳になるいまもソウルと東京を往復し、日韓の政界要人にアドバイスし続けている。そんな崔さんから、日本に連絡がきた。肺がんが脳に転移し、手術したが、さらに治療が必要になった。言語に障害をきたす恐れが強く、最後にお礼を申し上げたいとのことだった。私も駆けつけた。会場には、かつて福田氏から贈られたという長寿を願う自筆の書が掲げられていた。

＜五十六十花なら蕾　七十八十花盛り　百にてやっと実を結び　実は地に落ちて　種子となり　やがて芽を吹く新時代＞

好きな酒も飲まず、水で口を潤し、崔さんは日韓関係の冷却化を心配した。「日本では政治運動はいくら激しくても後に連携するんだな。首相の座を争っても和合する。日本は伝統を継承するが、韓国にはそれがない。前の時代を切り倒して捨てる。ここを反省しないといけない。文在寅（ムンジェイン）大統領は自分で船に穴を開けているんじゃないか。僕は日韓がわだかまりなくつきあえる日がくる夢を見ている。日本は36年間、よくもうちの国を支配したな、オマエはその息子か、ではいい友にはなれませんよ。そんな言い方をしないためにも韓国人は教養を高める必要があるし、日本人にも雅量があるでしょう」

時は流れ、日韓関係で岸ラインは影が薄くなっていく。日韓協力委員会は現在も活動を続けているが、かつての力はないといわれる。現会長は麻生太郎副総理兼財務相。98年には当時の小渕恵三首相と金大中（キムデジュン）大統領との間で「日韓パートナーシップ宣言」が出され、韓国で日本の大衆文化が解禁されたりもした。宣言から20周年になる今年、日韓の外務省は文化・人的交流の拡大を議論する有識者会合を設置した。現代韓国研究者の静岡県立大教授、小針進さん(55)はメンバーの一人で、研究者仲間と共同で「崔書勉オーラルヒストリー（口述記録）」を完成させたばかりでもある。元徴用工の判決のあった日は韓国にいた。

「韓国は無神経な国だなあとの声が日本社会でまた高まるだろうと憂慮しました。最高裁の判決については元徴用工は日本の犠牲者だから、当然といった道徳志向的な報道が多かった。日本社会の〝韓国疲れ〟の深刻さにメディアが無頓着なのが気になりました。誤った認識が定着するのは互いの社会にとって利益がありません。相手が間違っていたり、問題の深刻さを軽くとらえたりしている場合は、放置しないで直接指摘することが大切でしょう。20年前の宣言のキーワードは『和解』と、相手に対する『敬意』でした。ひょっとすると国交正常化したころの方がいまよりも政治家同士はお互いを認め、率直な物言いをしていたかもしれません。現在のように和解を忘れて、対抗のみをむき出しにするだけでは始まらないですから」

チマ・チョゴリ姿の女性とくつろぐ岸信介元首相（中央）、福田赳夫元首相（右から2人目）ら＝東京・赤坂の料亭「中川」で1969年2月

「どちらも冷静になりなさい」

くだんの日韓協力委員会の創立総会での議論は経済が主なテーマになった。国交正常化で日本から得た資金をもとにいかに経済を成長させていくか。「漢江（ハンガン）の奇跡」へ、日韓の参加者の鼻息は荒かった。そんな総会で、作家で初代文化庁長官の今日出海（こんでいでみ）さんのあいさつがふるっていた。「このごろのデモのプラッカードのように（略）ただ日韓親善などといって、賛成、賛成などといっているのでは何にもならないと思うのです。それは寒空にすうーと消えていくようなうつろなものです。われわれが本当に韓国のだれかと実際に友達になる、そのまた友達とまた友達になる、こういうような具体的な小さなことから始めていかなければ、私は何にもならないと思います」（前掲の「新国策」）

ところで、がん治療はうまくいったのだろうか？　ソウルの崔さんに電話したら、いつもの大きな声が返ってきた。「おかげさまで。しゃべれるよ！」。まだまだ「怪物」の出番がありますね、と水を向けたら、大笑いした。判決についてはこう言った。「うーん。両国の外交では歴史的解決と政治的解決がぶつかることがある。国交正常化のときは双方が政治的解決を急いだんだ。いま、あちこちから電話がかかってくる。僕は韓国も愛し、日本も愛している。どちらも冷静になりなさい、よく考えなさい、と言っておるよ」